

---

# 幸せな恋愛・・・？

O R I N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸せな恋愛・・・？

### 【Nコード】

N7798C

### 【作者名】

ORIN

### 【あらすじ】

主婦にとって幸せな恋愛って・・・？結婚と恋愛は、やっぱりベツモノ？結婚は女性にとって、本当に勝ち組なのかどうか・・・？  
あなたも考えてみませんか？

## 第1話 プロローグ

「今日のデートも楽しかったね♪また、明日のバイトでね・・・おやすみzzz」

家に帰った私は、子供の寝顔を確認しながらメールを打ち終わった。

隣の部屋では、夫が高いびきをかいて眠っている・・・

もう、何年になるだろう・・・夫の隣で眠らなくなつて。

夫と結婚したのは、15年前。私が20歳のときだった・・・

高校を卒業して社会人となった私は、先輩社員の夫と入社後まもなく付き合い始めた・・・

当時、夫は28歳。自分より10歳も年上の彼は、とても大人で頼もしく思えた。

そんな夫に夢中だった私は2年後、結婚した。

両親は、結婚は早い！と反対したが、夫のプロポーズに舞い上がっていた私は、耳を傾けなかった。

奥手だった私は、付き合い合ったのも初めての相手だったのも夫だった。ある意味、それはそれで幸せなことだったのかもしれない・・・カズヒロと出会うまでは。

結婚して、翌年に子供が生まれ子育てに追われる毎日・・・

一人息子に夢中になった私は夫に関心がなくなり、いつしか寝室も別になっていった・・・

その息子も中学生。親バカな私が言うのも何だけど、素直ないい子に育ってくれて、自慢の息子。

中学に入るまでは、私に甘えていた息子も勉強と部活に忙しくなり、私との会話もずいぶん減ってしまった……。上手に親離れしていく息子に寂しさを覚えた私は、隣町のスーパーへパートに出ることに……。

そして、基本的に時間の自由がきく私は、店長に重宝がられ、2年経った今では主任を任されるまでに……。もともと人と接する仕事に向いていたせいも、毎日が楽しく充実していた。

そんなある日のこと、アルバイトの面接でカズヒロがやってきた。あいにく店長が急用で、急ぎよ私が面接することに……。

「……カズヒロさんですね。年齢は……22歳で学生さん？希望の勤務時間は……夕方から……ですね。いつから、勤務できますか？……わかりました……。」

ひととおり、必要事項を聞いた私は、最後に連絡先を確認した。

「……では、2～3日中にこちらから連絡致しますので、お待ちくださいね。」

そう言つて、面接を終わろうとする私に、彼がこう言った。

「……すみません、あなたの連絡先教えてくださいませんか？」

## 第2話 ケイタイ・・・

「えっ？」

突然の申し出に驚いた私。とっさになんと返事をしていいかわからなかった。

「・・・あ、ぼくの言い方が悪かったです。実は、そのケイタイ料金滞納で、今使えないので・・・。だから、バイト先を探してたんだけど。やっぱり、カッコ悪いじゃないですか。なので、こちらから連絡しますので、あなたのケイタイ教えてもらえますか？」

ああ、そうなんだ・・・このときは納得して教えたものの、なぜお店の番号じゃなかったのか？後から、そんな疑問がわいてきた。

そんないきさつがあったものの、めでたく？！採用された彼は、意外にも働き者だった。

仕事の覚えもよく、何より人当たりの良さで、1カ月もするとオバサマ達のアイドルになった。

けれど、面接の一件があつたせいか、妙になつかれてしまった私。戸惑いながらもどこか心地よさを感じていた・・・。

彼が来てから3カ月を過ぎた頃、創業祭の打ち合わせで仕事が深夜になってしまった。

いつもバスで通っていた私は、タクシーで帰ろうと思ったとき、バツグンの中で携帯が鳴った。

「もしもし・・・」

「・・・真鍋さん？俺、カズヒロだけど・・・」

「ああ・・・おつかれさま。どうしたの・・・？」

「仕事、遅かったんでしょ？送るから、そこで待ってて！」

「えっ?!」

返事をするまでもなく、1台のバイクが止まった。

「おつかれさまです・・・」

そう言いながらメットを渡された私。

「タクシー拾うのも大変だろうから・・・」

そう言っただけは、後ろの座席を指差した。

何だか彼の言うままに後ろに乗った瞬間、バイクは走り出した・・・。

### 第3話 ドライブ

初めてバイクの後ろに乗ったのドライブ。

深夜なこともあって、ノンストップで走るバイクは車とは違う心地よさだった・・・。

少し肌寒い季節だったけれど、彼の背中の中暖かさが心も体も「ほんわか」と癒してくれるようだった。

海岸沿いを走っていると、24時間営業のファーストフード店の明かりが見えた・・・。

「ちよつと、休憩しよう！」

くぐもった彼の声に私は頷いた。

ゆっくり店の前にバイクを止めると、彼は私を抱えるようにバイクから降りしてくれた。

「バイク初めて？怖くなかった？」

私は軽く首を振りながら、笑顔で彼を見た・・・。

「よかったぁ・・・やっぱり人を乗せて走ると緊張するからなぁ・・・命預かってるわけだし・・・」

と、笑顔で彼は言った。

店の中へ入ると深夜だというのに結構、人で埋まっていた・・・。「ホットでいい？」と私に聞いて、彼はカウンターへ注文しに行った。

私は、海に見える窓際に空席を見つけて、そこへ座った。

しばらくして、彼が注文の品を持って、こちらにやってきた。が、トレーの上には商品が「てんこ盛り！」

思わず目が「テン」になったわたしを見て、彼が困ったように笑った。

「おなか空いてるでしょう？何がいいか分からなかったから・・・  
テキトーに頼んだら、こんなに・・・」

そんな彼の姿がなんだか可愛くて、ケラケラと笑ってしまった。

「ごめんね、なんだかそんなカズヒロ君の姿、仕事のときは見ないからさ・・・何だか新鮮で可愛い！！と思って・・・」

「か、かわいい・・・って・・・」

ちよつとシヨックを受けたような彼だったけど、二人で上司の悪口  
？！を言いながら、楽しい時間を過ごした・・・。

## 第4話 メール

1時間ほど過ごした後、家まで無事送り届けてくれた彼。

ご近所の目を気にしながらも、彼が見えなくなるまで見送った・・・。

しん・・・とした家の中へ入ると、何だか少しホツとした。

別に緊張してたつもりはないのに、無意識のうちにどこか身構えていたのかもしれない・・・。

紅茶を入れて、一息ついて時計を見ると・・・午前3時。

無事、帰ったかしら？と思っていると、ケイタイが鳴った・・・。

「無事、家に着きました^v^/おやすみなさいzzz」

彼からのメールだった。さっきお店でメール交換したんだった・・・。

一応、お礼も兼ねて返信した。

「無事、着いてよかったです^^今日はホントにありがとう！たのしかったよ」おやすみm-m」

翌日と言っても今日だけど・・・夕方にカズヒロは出勤してきた。

今までそんなに意識しなかったのに、今日は気づくと彼を目で追っていた・・・。

すると、結構、彼は人気者なんだあ・・・と改めて実感。

常連のお客様たち・・・小さなお子様からお年寄りまで・・・みんながカズヒロを見つけては話しかける。もちろん、同僚たちも・・・。

あの人あたりのよさと、どこかホツトさせる笑顔に、みんな癒されるのかなあ・・・。

そう思うと昨夜のドライブも、ただの親切心からだっただのかな・・・？

最近の若い男の子は、優しい！って聞くしなあ・・・。

少し自分は特別なんだ！と勘違いしていたのが恥ずかしくなった・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7798c/>

---

幸せな恋愛・・・？

2010年12月14日20時26分発行